

# 子縁によるコミュニティと 地方都市中心市街地への居住意識に関する研究

鈴木 雄<sup>1</sup>・日野 智<sup>2</sup>・川畑 優人<sup>3</sup>・中村 光太郎<sup>4</sup>

<sup>1</sup>正会員 秋田大学大学院 工学資源学研究科 (〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1)  
E-mail:yusuzuki@gipc.akita-u.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 秋田大学大学院 工学資源学研究科 (〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1)  
E-mail:hino@gipc.akita-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 北見市役所 都市建設部 (〒090-8509 北見市大通西2丁目1番地)  
E-mail:yuto.kawahata@city.kitami.lg.jp

<sup>4</sup>学生会員 秋田大学大学院 工学資源学研究科 (〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1)  
E-mail:m9015155@wm.akita-u.ac.jp

中心市街地においても多様な年代の人が住み、コミュニティを形成することが本来あるべき姿といえる。本研究では、子供を介した地域の縁「子縁」に着目し、地域に子供がいることの重要性を再確認するとともに、子育て世代の街なか居住に関する意識の把握を目的とした。分析の結果、普段子どもとの接触が多くない人であっても、子縁による効果を認識していることが明らかとなった。また、子縁を通じた地域コミュニティの構造も把握できた。子育て世代の街なか居住に関して、街なか居住者と街なか以外の居住者として意識の比較を行ったところ、「事故の危険性」「治安の悪さ」「子育てのしやすさ」などにおいて、街なか以外の居住者の方が過度に悪い印象を持っていることが明らかとなった。これらの項目のイメージを改善することが必要といえる。

**Key Words :** *central district living, child care environment, community of through the child*

## 1. はじめに

近年、地方都市の中心市街地は、訪問し買い物やレジャーを楽しむ場所から、居住する場所へと変わってきている。また、コンパクトシティの実現のため、このような街なか居住の実現が求められている。これに対し、多くの地方都市では、自家用車を利用できず、公共交通のみの移動に頼らざるをえない高齢者を街なかへ居住させるための取り組みが行われてきた。例えば、高齢者向けの住宅整備や、街なかのバリアフリー化である。このように高齢者に優しい街づくりを実現すること自体は非常に重要である。実際にこれらの取り組みにより、高齢者の街なか居住は促進されていると考えられる。一方で、戸建て志向の強さや、街なかの住居費の高さ、住環境などの問題から子育て世代の街なか居住は少ないように思われる。地方都市では郊外の大型ショッピングセンターの進出に伴い、その周辺に新興住宅地が整備されることが多くみられる。子育て世代の街なか居住に対する取り組みは、高齢者のものと比較し少なく、それらが実現されているとは言い難い。地方都市の中心市街地において、

「高齢者に優しい街づくり」が実現される中で、悪い言い方をすれば「姥捨て山」のようになることが懸念される。本来、地域には多様な世代が住み、コミュニティを形成すべきである。ますます希薄になりつつあるコミュニティの中で、街なか居住の促進施策を高齢者だけに偏るのは、高齢者にとっても悪ではないか？そこで、本研究の第一段階として、地域に子どもがいることによる意義を再確認することを目的とした。そのため「子縁」によるコミュニティに着目している。「子縁」とは、子どもを通じたコミュニティのことで、例えば、地域の子どもと地域の住民、子どもを通じて知り合った地域の住民同士のコミュニティである。地域に子どもがいることで、学校行事や祭り、親同士のつながりなどによるコミュニティ形成や地域の活性化に期待ができる。これらの「子縁」によるコミュニティの効果を把握することで、地方都市の中心市街地における子育て世代の居住促進の必要性を考察する。また、研究の第二段階として、子育て環境に関する意識調査から、地方都市中心市街地での子育てについて必要とされる環境要因の把握を行う。これについて、地方都市の中心市街地の居

住者と、中心市街地以外の居住者とで居住地に対する子育て環境への意識の分析を行う。また中心市街地以外の居住者の中心市街地への居留意識や、子育て環境についての意識を把握することで、子育て世代の街なか居住について必要な要因の考察を行う。

## 2. 研究の方法

本研究は、(1)子縁による地域コミュニティに関する分析と、(2)子育て世代の街なか居住に関する分析の2段階の分析において行う。以下のその調査の概要を示す。

### (1)子縁による地域コミュニティの意識調査概要

子縁による地域コミュニティを明らかとするため、意識調査を実施した。意識調査は、秋田市の御所野地区、川尻地区、大住地区の3地区で行っている。御所野地区は、JR秋田駅から南東約6.5kmに位置するニュータウンである。地区内には平成5年に開業した大型ショッピングセンターが存在する。また、地区内には保育園や幼稚園のほか、小学校、中高一貫校が存在する。川尻地区は、JR秋田駅の西方約4kmに位置する住宅地である。地区内には、保育園と保育所が1つずつ、幼稚園が1つ、小学校が1つ存在する。大住地区は、JR秋田駅の南西約3kmに位置する住宅地である。地区内には、保育園が1つ、幼稚園が1つ、小学校が1つ、高校が1つ存在する。

意識調査は、平成26年12月21日に直接配布・郵送回収方式にて実施した。調査票は各地区200世帯400部の合計1,200部を配布した。その結果、合計201世帯から284票を回収している。意識調査では、個人属性の他に、地域活

表-1 子縁による地域コミュニティに関する意識調査の概要

調査概要			
調査日	平成26年12月21日		
調査方法	直接配布・郵送回収方式		
地域特性および回収票数			
人口構成	御所野	川尻	大住
15歳未満	1,414 (18.3%)	716 (13.1%)	341 (12.9%)
15-64歳	5,117 (66.2%)	3,561 (65.4%)	1,526 (57.7%)
65歳以上	1,160 (15.0%)	1,165 (21.4%)	773 (29.2%)
回収票数(回収率)	94 (23.5%)	108 (27.0%)	84 (21.0%)
調査内容			
個人属性 (性別, 年齢, 居住年数, 同居人など)			
地域活動への参加状況 (共同清掃, 祭り, 運動会など)			
普段の生活満足度 (外出頻度, 近所づきあいなど)			
近所の子どもの関わり (子どもと関わることが好きかなど)			
近所の子どもの関わり頻度 (挨拶, 親同士の会話など)			
地域に子どもがいることの効果認識 (生きがいになるなど)			
地域の人との関わり (町内会行事を代わってもらうなど)			
地域の問題解決意識 (子どもの安全安心に関する責任など)			

動への参加状況、普段の生活の満足度、近所の子どもの関わりについての意識、近所の子どもの関わり頻度、地域に子どもがいることの効果認識、地域の人との関わり、地域の問題解決意識などの質問を行っている。地域の人との関わりや地域の問題解決意識の質問は、子縁により地域との関わりや問題解決意識が醸成されていることを明らかとするためである。地域の人との関わりや地域の問題解決意識については、川原ら<sup>1)</sup>の研究のソーシャルキャピタルに関する貸し借りの指標を参考に決定した。表-1に子縁による地域コミュニティに関する意識調査の概要を示す。

### (2)子育て世代の街なか居住に関する意識調査概要

地方都市中心市街地の子育てについて必要とされる環境についての把握を行うため、中心市街地に居住している住民と、中心市街地以外に居住している住民に対し、意識調査を実施した。子育て世代の街なか居住に関する意識調査は、秋田市のJR秋田駅周辺地区、将軍野地区、桜地区の3地区で行っている。秋田市では、平成26年6月で終了した秋田市中心市街地活性化基本計画においてJR秋田駅を含む1.19km<sup>2</sup>を中心市街地として規定している。中心市街地活性化基本計画では、文化と交流の拠点形成をめざし中通一丁目に「エリアなかいち」を建設し、歩行者交通量や街なか居住者数の目標を設定した。「エリアなかいち」敷地内の住宅棟内にはケアハウスがオープンしたが、当初目標としていた中通一丁目における169名の居住者増加は達成されず、106人の増加にとどまっている。JR秋田駅周辺地区には、1つの幼稚園、2つの小学校、3つの高校が存在する。また、文化施設や公共施設のほか、久保田城の本丸・二の丸跡地に整備され面積16.29haの千秋公園などの公園も整備されている。将軍野地区は、JR秋田駅の北西約5kmに位置する住宅地である。地区内には、保育園が2つ、幼稚園が3つ、小学校1つ、中学校1つ、高校が1つ存在する。桜地区は、JR秋田駅の東方約2.5kmに位置する新興住宅地である。地区内には、保育園が1つ、小学校が1つ、中学校が1つ存在する。

意識調査は、平成26年12月20日に直接配布・郵送回収方式にて実施した。調査票は、各地区200世帯400部の合計1,200部を配布した。また、追加調査としてJR秋田駅周辺地区マンション居住者を対象に平成27年1月8日に実施した。その結果、JR秋田駅周辺地区の戸建て住宅居住者から58世帯84部、JR秋田駅周辺地区マンション居住者から33世帯46部、将軍野地区で60世帯84部、桜地区で70世帯93部を回収している。意識調査では、個人属性の他に、現居住地の満足度、現居住地の保育・教育環境、中心市街地居住に関するイメージ、居住地決定の際の重要度評価などの質問を行っている。表-2に子育て世代の街なか居住に関する意識調査の概要を示す。

表-2 子育て世代の街なか居住に関する意識調査の概要

調査概要			
調査日	平成26年12月20日 平成27年1月8日 (マンション居住者対象 追加調査)		
調査方法	直接配布・郵送回収方式		
地域特性および回収票数			
人口構成	街なか※1	將軍野※2	桜
15歳未満	356 (9.3%)	923 (12.9%)	376 (11.6%)
15-64歳	2,304 (59.9%)	4,283 (59.9%)	1,965 (60.4%)
65歳以上	1,128 (29.3%)	1,165 (27.1%)	898 (27.6%)
回収票数(回収率)	84 (21.0%) 46 (18.4%)※3	84 (21.0%)	93 (23.3%)
調査内容			
個人属性 (性別, 年齢, 居住年数, 同居人など)			
居住地の満足度 (買い物の利便性, 治安の良さ, 静寂さ, 保育・教育施設の充実度など)			
子育て環境満足度 (子どもの遊び場, 保育教育施設 治安, 子育てについての相談環境など)			
中心市街地のイメージ (家賃, 除雪, 買い物, 子育て, 住民との関わり, 交通など)			
居住地選択の重要度 (交通, 教育, 買い物, 住み心地, 地域コミュニティーなど)			

※1 街なか=JR秋田駅周辺地域 調査票配布地区である中通の人口構成

※2 調査票配布地区である將軍野南の人口構成

※3 マンション対象者追加調査分

### 3. 子縁によるコミュニティー

#### (1)子縁による状況と子縁の大きさによる分類

本研究では、子どもと地域の住民との関わりや、子どもを通じて知り合った地域の住民同士の関わりである子縁に着目した。地域全体で子どもを育てることの必要性の認識を図-1に示す。被験者の約55%が地域全体で子どもを育てることが「必要である」と回答し、約40%が「どちらかといえば必要である」と回答している。多くの住民が、地域として子どもを育てることの必要性を感じていることがわかる。次に、地域の子どもの保育や教育に自身に関わりたいかどうかの質問を行った。その結果を図-2に示す。地域の子どもの保育や教育に自身「関わりたい」と回答したのは約8%、「少し関わりたい」と回答したのは約43%となった。合わせて約50%の住民が地域の子どもの保育・教育に関わりたいという結果になったが、これは、地域全体で子どもを育てる必要性の認識よりも少ない。地域で子どもを育てることの必要性は認識しているが、自身はその教育に関わりたくないと感じている被験者の存在が確認された。

本研究では、子縁の大きさにより被験者を分類し、分析を行う。子縁の大きさをLevel1からLevel5の5段階に分類した。子縁の大きさによる分類のフローを図-3に示す。子縁の大きさに関して、本研究では「近所の子どもを

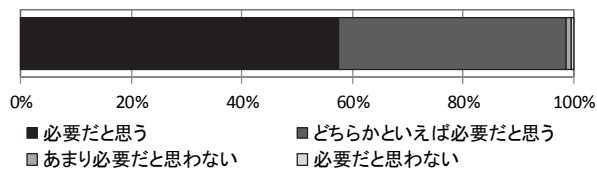


図-1 地域全体で子どもを育てることの必要性の認識

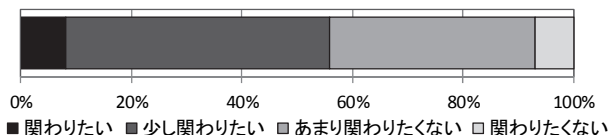


図-2 地域の子どもの教育活動への参加意向

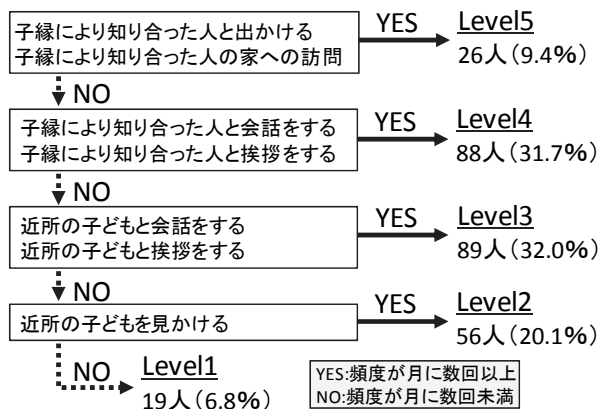


図-3 子縁の大きさによる被験者の分類

見かける」や「近所の子どもと挨拶をする」、「近所の子どもと会話をする」などの地域の子どもと住民との関わりに関するものや、「子縁により知り合った人と会話をする」や「子縁により知り合った人の家を訪問する」など合計8項目の質問を行っている。これらの質問に対し、「月に1回以上の頻度で行っている」と回答した被験者において分類を行った。例えば、「子縁により知り合った人と出かける」や「子縁により知り合った人の家を訪問する」の質問に対し「月に1回以上の頻度で行っている」と回答した被験者をLevel5としている。次に、Level5以外の被験者で「子縁により知り合った人と会話をする」や「子縁により知り合った人と挨拶をする」に対し「月に1回以上の頻度で行っている」と回答した被験者をLevel4としている。このように分類を繰り返し、最終的には「月に1回以上近所の子どもを見かけることはない」と回答した被験者をLevel1としている。月に1回以上の頻度を分類基準としているのでLevel1の被験者であっても、まったく子どもを見かけることがないわけではない。次に、子縁の大きさにより分類された各子縁レベルの基本属性を表-3に示す。Level1の被験者は、「40～50代」の割合が高い。これは、働いていることで普段は近所の子どもを見る機会が少ないことが考えられる。

Level3やLevel4, Level5の被験者では「60歳以上」の割合が最も高い。当初、子縁レベルの高い被験者は、子育て世代に多いと予想していたが、予想とは異なる結果となった。子育て世代の被験者であっても、子縁の少ない被験者がいることが確認できる。「通勤や通学を含めた外出を週3日以上する」割合をみると、子縁のレベルによって違いはみられない。「通勤・通学を除いた週3以上の外出」、「近所の住民と週に3日以上会話」、「週に1日以上近所の家を訪問する」では、子縁レベルが上がるにつれて、それぞれの被験者の割合も増加する傾向にある。

次に、各子縁レベルの地域での行事や活動への参加状況を表4に示す。全体的に子縁レベルの高い被験者ほど、各行事や活動への参加率が高い。各活動への参加により子縁状況が高くなっていることが考えられる。「共同清掃」や「安全パトロール」、「地域のお祭り」への参加率でみると、Level4の被験者よりLevel5の被験者の方が低くなっている。これは、子縁レベルが高く、個々のつながりはあるものの、「共同清掃」などの地域共同での行事への参加はしていない被験者が存在することが原因と考えられる。今後は、各子縁レベルにおける属性や、行事・活動への参加状況と子縁との関係の詳しい分析が必要である。

## (2)子縁による地域への効果

子縁による効果の分析を行う。まずはじめに、各子縁

表3 各子縁レベルの属性

	Level1	Level2	Level3	Level4	Level5
30歳未満	0.0%	16.1%	3.4%	4.5%	19.2%
40～50代	63.2%	28.6%	24.7%	39.8%	34.6%
60歳以上	36.8%	55.4%	71.9%	55.7%	46.2%
週3日以上外出	94.4%	91.1%	86.5%	93.2%	92.3%
週3日以上外出 (通勤・通学以外)	52.6%	53.6%	60.7%	72.7%	92.3%
週3日以上 近所の住民との会話	5.3%	37.5%	56.2%	67.0%	84.6%
週1日以上 近所の家を訪問	0.0%	3.6%	9.0%	14.8%	23.1%

表4 各子縁レベルの行事・活動への参加状況

	Level1	Level2	Level3	Level4	Level5
共同清掃	32%	50%	71%	74%	65%
安全パトロール	0%	11%	19%	30%	19%
共同除雪	5%	13%	23%	34%	38%
お祭り	21%	40%	53%	67%	62%
小中学校運動会	21%	30%	37%	51%	52%
地域運動会	16%	20%	27%	40%	42%
地域食事会	0%	23%	28%	48%	50%
地域植栽活動	0%	5%	13%	16%	15%
コミセイバント	5%	2%	19%	35%	38%
問題解決WS	0%	2%	1%	7%	8%
地域ボランティア	0%	4%	21%	19%	27%
高齢者子ども交流会	0%	4%	4%	7%	12%
親の交流会	5%	16%	18%	26%	38%
地域健康教室	5%	7%	13%	24%	15%
町内会会長会計	5%	14%	25%	17%	8%
保護者会役員	5%	16%	18%	27%	38%

レベルにおける、普段の生活の満足度を図4に示す。全体的に子縁のレベルが上がるほど、生活の満足度が高くなる傾向にある。子縁レベルの高い被験者は、「通勤・通学以外での外出頻度」が高く、「近所の住民との会話の頻度」も高い。それらが高い満足度につながっていると考えられるが、子縁によるコミュニティの醸成により生活の満足度が向上していることも考えられる。一方で「友人にあう頻度」や「家族以外の人との会話の回数」の満足度では、Level5の被験者よりLevel4の被験者の方が高い。Level5は、月に1回以上「子縁により知り合った人と出かける」または「子縁により知り合った人の家へ訪問する」被験者である。過度な付き合いが重荷になり、満足度が下がっている可能性も考えられる。

次に、各子縁レベルにおける、子縁の効果認識について図5に示す。全体的に子縁レベルの高い被験者の方が、その効果を認識していることがわかる。Level1の被験者であっても「子どもが遊ぶのや元気にしているのを見ることで自分も元気になる」では約55%、「子どもとの関わりの中で近所の人とのつながりもできる」や「子どもの安全や教育を守るために地域で一丸となるきっかけになる」では約50%の被験者がその効果を認識している。普段子どもとの関わりがなくても、子縁は地域のコミュニティを醸成するうえで重要な役割を果たすといえる。

- 友人に会う頻度
- 趣味や娯楽に費やす時間
- 普段の生活で外出する回数
- 町内会活動への参加
- 近所づきあいの内容
- 近所の子どもとの交流
- 普段の生活で外出できる範囲
- 家族以外の人との会話の回数
- 普段の生活全般の満足度

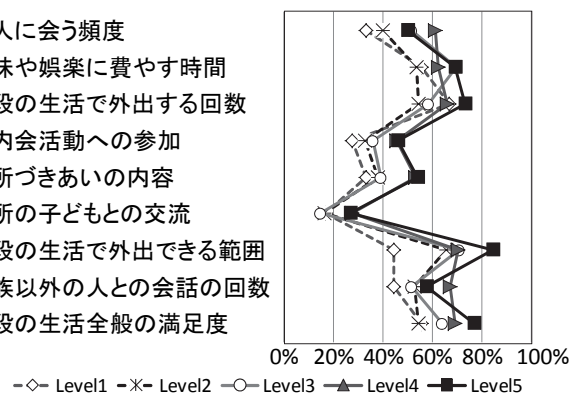


図4 各子縁レベルの生活満足度

- 子どもが遊ぶのや元気にしているのを見ることで自分も元気になる
- 子どもとの関わりの中で近所の人とのつながりもできる
- 子どもの安全や教育環境を守るために地域で一丸となるきっかけになる
- 子どものために行うボランティア活動や、奉仕活動によって生きがい生まれる
- 地域の子どものスポーツや文化活動を応援することで元気になる
- 自分の経験や技術を子供たちに伝える場ができる

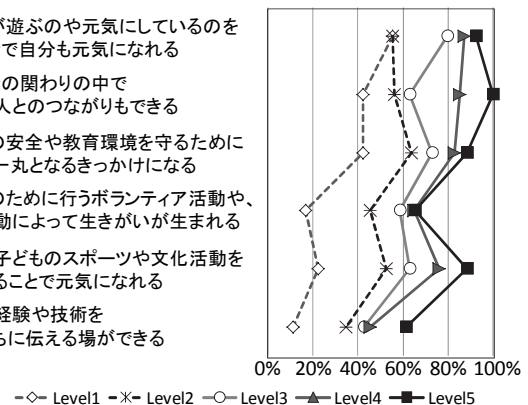


図5 各子縁レベルの子縁による効果認識

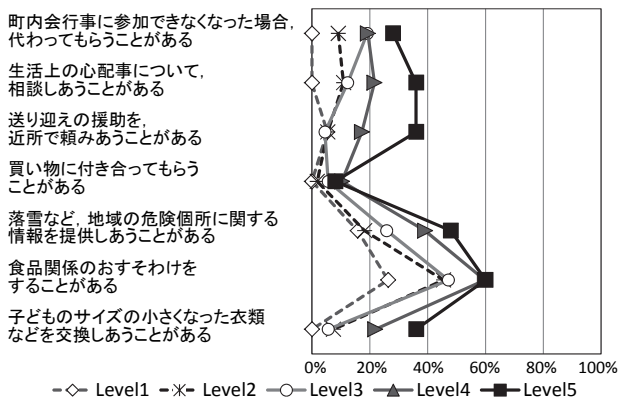


図-6 各子縁レベルの地域の住民との関わり

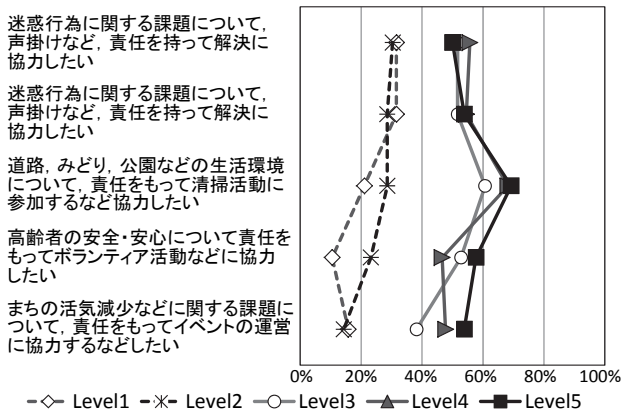


図-7 各子縁レベルの地域の課題解決意識

次に、各子縁レベルにおける、地域の住民との関わりについて図-6に示す。本分析においては、川原ら<sup>1)</sup>の研究における、ソーシャルキャピタルの貸し借りの指標を参考にした。全体的に子縁レベルの高い被験者ほど地域の住民との関わりが大きい。Level4やLevel5の被験者では約60%が「食品関連のおすそわけをすることがある」と回答している。子縁により知り合った人に対し、食品関連のおすそわけをしていることが考えられる。一方で、「買い物につきあってもらうことがある」については、Level5の被験者でも10%となり、ほかのLevelの被験者との差がみられない。買い物は、地域のつながりとは異なり、個人的なものであるために子縁のLevelによらないものと考えられる。

次に、各子縁レベルにおける、地域の課題解決意識について図-7に示す。地域の課題解決意識に関しては、Level2とLevel3との間で別れる結果となった。Level2は、近所の子どもの見かけることがある被験者、Level3は近所の子ともと挨拶をしたり、会話をしたりする被験者である。ただ見かけるだけでは、地域の課題解決意識は醸成されない。挨拶や会話をすることが重要といえる。

### (3)子縁による関連要因の構造化

子縁レベルと子縁による効果認識、地域の住民との関

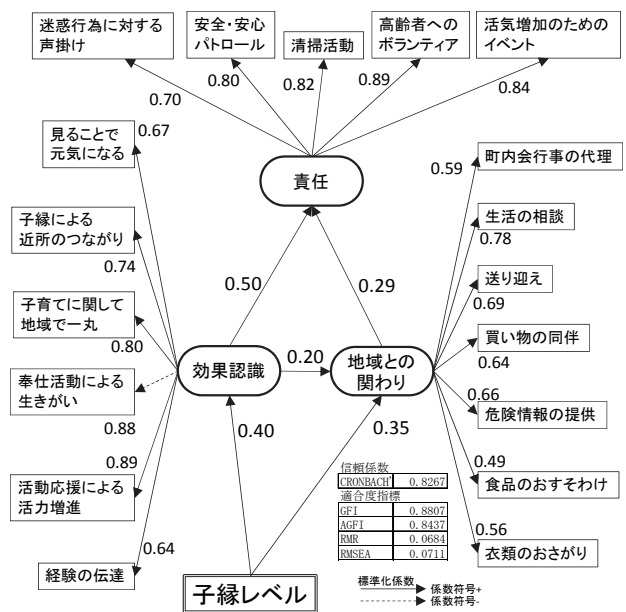


図-8 子縁による関連要因の構造

わり、地域の課題解決意識との間に関係性がみられたことから、これらの子縁による関連要因の構造化を行った。共分散構造分析により分析を行っている。子縁による関連要因の構造を図-8に示す。GFIは0.88となった。図に示したパスはすべて優位傾向を示している。「子縁レベル」からの相関係数をみると、「効果認識」へは0.40、「地域との関わり」では0.35となり、やや「効果認識」への影響が高くみられる。また、「責任」へのパスは、「効果認識」が0.50、「地域との関わり」が0.29となり、こちらも「効果認識」の影響が大きくみられる。子縁による効果認識が、地域の課題解決意識に影響する構造が見られた。全てのパスの中で、「効果認識」から「子どものために行うボランティア活動や奉仕活動によって生きがい生まれる」のパスのみ負の相関係数になった。

## 4. 子育て世代の街なか居留意識

### (1)居住地の満足度と重要度評価

子育て世代の街なか居留意識の把握を行うにあたり、まずは、各調査地区における満足度や自宅周辺の環境に対する重要度の分析を行う。以下、秋田市中心市街地(JR秋田駅周辺地域)を「街なか」とする。

各地区の子どもの有無を図-9に示す。現在子どもがいる被験者の割合は、街なかでは約20%、將軍野地区で約30%、桜地区で約60%となっている。新興住宅地である桜地区では子育て世代の割合が高い。次に、現居住地での居住年数を図-10に示す。街なかと桜地区では居住年数が10年以下の被験者が約40%であるのに対し、將軍野地区では約15%となっている。將軍野地区は古くからあ

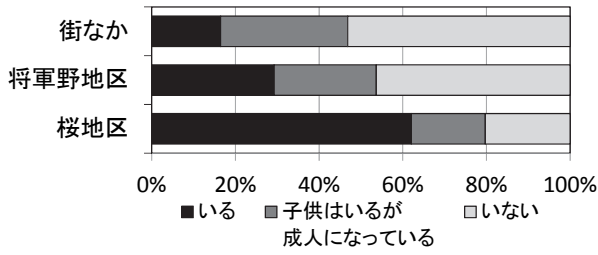


図-9 各地区の子どもの有無

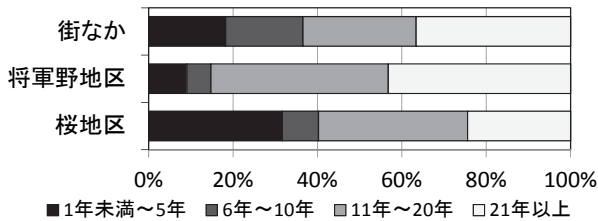


図-10 各地区の居住年数

る住宅地といえる。

次に、各地区における普段の生活の満足度を図-11に示す。図-11は各問に対し「満足」「やや満足」と回答した被験者の割合である。街なかでは、「食料品・日用品の買い物の利便性」や「公共交通の利便性」、「公共施設・文化施設の充実度」の満足度が高い。一方で、「緑地、街路樹などの緑の豊かさ」や「住宅の静寂さ」、「保育・教育施設の充実度」に関しては、他の地区よりも満足度が低い結果となった。地域の総合満足度は、どの地区も変わらず、約80%の被験者が満足と回答している。次に、各地区の総合満足度に与える影響要因を明らかとするため、外的基準を「地域の総合満足度」、アイテムを地域の満足度の各要因として数量化理論II類による分析を行った。分析によるレンジ値を表-5に示す。相関比はいずれの地区でも0.5を上回っており、低くはない。街なかでは、「公共交通の利便性」や「食料品・日用品の買い物の利便性」、「公共施設・文化施設の充実度」のレンジの値が大きい。これらの項目は満足度も高く、現況の高い満足度を維持する必要がある。一方で、「住宅の静寂さ」や「保育・教育施設の充実度」のレンジ値は高くない。総合満足度に与える影響は少ないといえる。これらの項目の満足度は低く、街なかに住んでいる被験者にとって、子育てよりも他の項目に魅力を感じ居住していると考えられる。将軍野地区では、「住宅の静寂さ」や「保育・教育施設の充実度」のレンジの値が大きい。これらの項目が地区の総合満足度に影響を与えているといえる。将軍野地区のこれらの項目の満足度は低くはない。これらの項目の満足度の維持とさらなる改善が求められる。桜地区においても「住宅の静寂さ」や「保育・教育施設の充実度」のレンジ値は低くない。これらの子育て環境の充実が地域全体の満足度向上のた

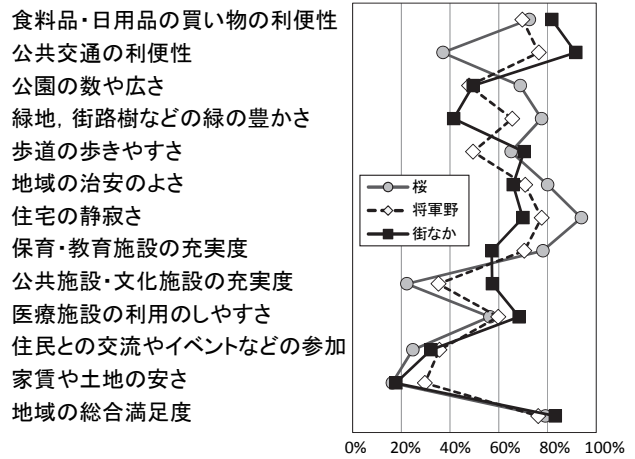


図-11 各地区の普段の生活の満足度

表-5 各地区の総合満足度への影響要因

	街なか	将軍野	桜
食料品・日用品の買い物の利便性	0.82	0.78	0.98
公共交通の利便性	1.24	1.05	0.34
公園の数や広さ	0.26	0.60	0.52
緑地、街路樹などの緑の豊かさ	0.13	0.42	0.90
歩道の歩きやすさ	0.57	0.35	0.67
地域の治安のよさ	0.70	1.05	1.12
住宅の静寂さ	0.30	2.38	1.05
保育・教育施設の充実度	0.49	2.03	0.75
公共施設・文化施設の充実度	0.80	0.69	1.08
医療施設の利用のしやすさ	0.71	0.32	1.20
住民との交流やイベントなどの参加	0.58	0.46	0.50
家賃や土地の安さ	0.44	0.11	0.39
相関比	0.585	0.692	0.532

めには必要である。

自宅周辺の満足度と、総合満足度への影響要因が明らかとなったところで、自宅周辺の居住環境に対する重要度評価を行った。本研究では、集団の選好意識を明らかにするECR法を用い、自宅周辺に必要な環境の重要度を評価してもらった。本研究は生活する上で必要な環境を7つ提示し、合計が0となるように各項目に+5~-5点の点数を付けてもらった。 $m$ 人の集団の項目 $i$ の $j$ に対する選好度は式(1)で表される。

$$g(c_{ij}^1, \dots, c_{ij}^m) = \sum_{l=1}^m w^l c_{ij}^l + \lambda \sum_{l=1}^m w^l \text{Min}(0, c_{ij}^l) - m\theta \quad (1)$$

$g$ : 集団の選好度

$c_{ij}^l$ : 意思決定者 $l$ による項目 $i$ の項目 $j$ に対する選好度

$w^l$ : 意思決定者 $l$ の重み(=1)

$\lambda (\geq 0)$ : 大きいほど意見の一致度を高くとする値

$\theta (\geq 0)$ : 弱い関係を排除する閾値

ECR法の結果は、上方にある項目ほど重要度が高く、下方ほど重要度が低くなるよう構造化される。本研究では、自宅周辺の居住環境に必要な要因として、「駅・バス停に近いこと」や「病院・福祉施設に通いやすいこと」、「勤め先・在学中の学校が近いこと」など以下の7項目



図-12 自宅周辺の環境に対する重要度評価 ( $\lambda=0$ )



図-14 自宅周辺の環境に対する重要度評価 (子あり  $\lambda=0$ )

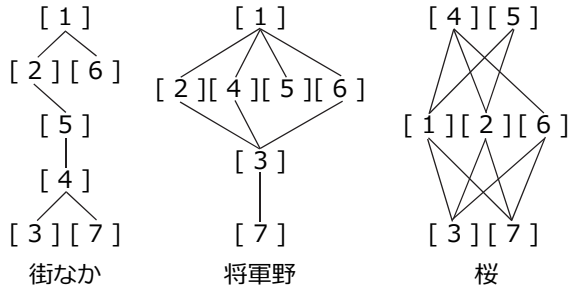


図-13 自宅周辺の環境に対する重要度評価 ( $\lambda=0.5$ )

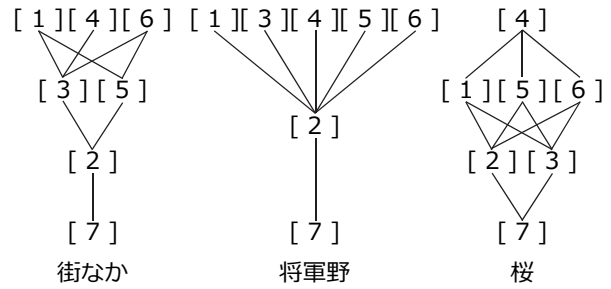


図-15 自宅周辺の環境に対する重要度評価 (子あり  $\lambda=0.5$ )

において重要度評価を行っている。

- [1]: 駅・バス停に近いこと
- [2]: 病院・福祉施設に通いやすいこと  
(様々な病院, 高齢者専用のケアセンターなど)
- [3]: 勤め先・在学中の学校が近いこと  
(あなたが通う職場, 大学, 短大, 専門学校など)
- [4]: 子どもの保育・教育環境が整っていること  
(子どもが通う幼稚園・保育園・小学校・中学校など)
- [5]: 買い物の利便性が良いこと  
(スーパー, ホームセンターなど日常的に利用する商業店)
- [6]: 住み心地が良いこと  
(周辺の静寂さ, 治安が良いことなど)
- [7]: 近所の住民とのコミュニティーが良いこと  
(困ったときに相談できたり, 手助けしあえるなど)

ECR法の分析の結果を図-12に示す。街なかでは、「駅・バス停に近いこと」の重要度が最も高い。交通面で重視していることがわかる。「子どもの保育・教育環境が整っていること」では、全体で上から5番目の重要度となっている。街なかにおいては、「子どもの保育・教育環境が整っていること」は、そこまで重要視されていない。将軍野地区においても「駅・バス停に近いこと」の重要度が最も高い結果となった。「子どもの保育・教育環境が整っていること」に関しては、上から3番目の重要度となっている。桜地区では、「子どもの保育・教育環境が整っていること」が最重要項目と

なっている。 $\lambda$ の値を0.5とした重要度評価を図-13に示す。 $\lambda$ の値を大きくすることで反対意見を考慮した重要度評価が可能である。具体的には、 $\lambda$ の値を0.5とすることで、反対意見を1.5倍取り入れたことになる。 $\lambda$ の値を0.5とした場合でも、桜地区では「子どもの保育・教育環境が整っていること」が最重要項目となっている。「子どもの保育・教育環境が整っていること」を重要としていない被験者が少ないことがわかる。桜地区において「子どもの保育・教育環境が整っていること」が最重要項目となったことは、桜地区で子育て世代が多いことが影響していることが考えられる。そこで、各地区の子育て世代のみを抽出し重要度評価を行った。各地区の子育て世代のみの重要度評価( $\lambda=0$ )を図-14に、反対意見を考慮した重要度評価( $\lambda=0.5$ )を図-15に示す。子育て世代のみで重要度評価の分析を行ったところ、「子どもの保育・教育環境が整っていること」は、街なかでは上から3番目の重要度、将軍野では上から2番目の重要度となった。桜地区では「子どもの保育・教育環境が整っていること」が最上位であることは変わらなかった。 $\lambda$ の値を0.5にした場合では、すべての地区で「子どもの保育・教育環境が整っていること」が最重要項目となる。街なかに居住している子育て世代の被験者は、「駅・バス停に近いこと」の交通面での利便性を重要視しながらも、子どもの保育・教育環境においても重要視している。街なか居住を促進するためには、子育て環境を整備することも重要である。自宅周辺の環境に対する重要度評価においては、すべての地区において

「近所の住民とのコミュニティーが良いこと」について最も重要視されていないことが明らかとなった。従来、子育てをするうえで、近所のコミュニティーは重要であると考えられてきた。しかし現在において、核家族化が進み、防犯などの問題から、保育園や幼稚園など公的な機関を利用しての子育てが望まれていると考えられる。

(2)子育て環境への評価と中心市街地に対するイメージ

中心市街地の子育て環境の評価と、中心市街地へのイメージの分析を行う。まずは、各地区の現居住地の子育て環境の評価分析を行う。各地区の保育・子育て環境への評価を図-16に示す。図-16は、子育て環境に対する各問に対し「そう思う」「ややそう思う」と回答した被験者の割合である。全体的に、街なかの評価が低い結果となった。特に、「保育・教育施設の周辺では、騒音が気にならない」や「近所に保育や教育などについて相談できる人がいる」において低い評価となっている。次に、子育てに関する地域の総合評価に影響する要因の把握を行うために、数量化理論Ⅱ類による分析を行った。外的基準を地域の子育て環境の総合評価、アイテムを地域の子育て環境に関する各項目とした。分析により得られたレンジの値を表-6に示す。街なかでは、「保育・教育施設周辺で騒音が気にならない」や「保育・教育に関する情報が得られる」の項目で、レンジの値が大きく、これらの項目が子育てに関する地域の総合満足度に与える影響が大きいといえる。

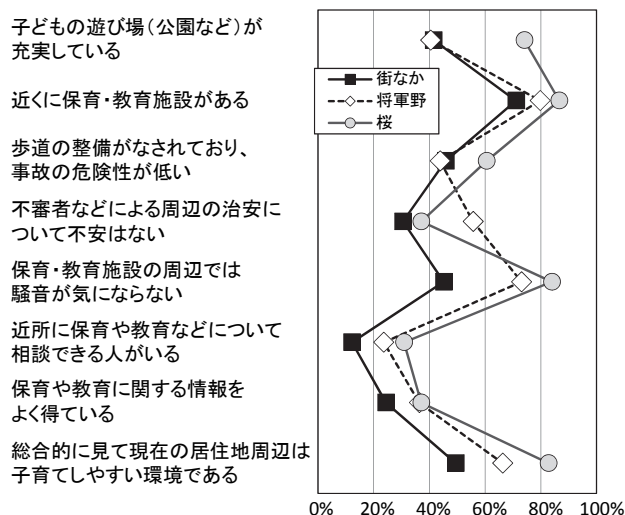


図-16 各地区の保育・子育て環境への評価

表-6 各地区の保育・子育て環境評価への影響要因

	街なか	将軍野	桜
子どもの遊び場が充実している	0.90	0.43	1.63
近くに保育・教育施設がある	0.34	1.31	2.41
歩道の整備され、事故の危険性が低い	0.70	0.44	0.47
周辺の治安について不安がない	0.04	0.47	0.83
保育・教育施設周辺で騒音が気にならない	1.81	0.86	0.14
保育・教育について相談できる人がいる	0.64	0.75	0.62
保育・教育に関する情報が得られる	1.43	0.61	0.47
相関比	0.605	0.680	0.535

一方、将軍野地区や桜地区では「近くに保育・教育施設がある」ことの項目でレンジ値が大きい。「近くに保育・教育施設がある」の満足度は両地区で共に高く、これらの満足度の大きさが地域の総合満足度に影響しているといえる。また、桜地区では「子どもの遊び場(公園など)が充実している」のレンジ値も大きい。子どもの遊び場に関する桜地区の満足度は、街なかや将軍野地区よりもかなり大きく、この項目においても地域の子育て環境に与える影響が大きいといえる。

次に、街なかに居住している被験者の、街なかでの子育て環境に関する評価と、将軍野地区と桜地区に居住している被験者の、街なかの子育て環境に対するイメージの比較分析を行う。街なか居住者の評価は実際に居住しての評価である。つまり、街なかにおける子育ての実情と、他地区から街なかの子育て環境をみたイメージとの比較を行う(図-17)。街なか居住者の約70%が「近くに保育・教育施設がある」と回答しているのに対し、桜地区でそのように思っている被験者は約40%、将軍野地区の被験者では約20%となっている。同じように「子どもの遊び場(公園など)が充実している」や「歩道の整備がなされており、事故の危険性が低い」、「保育・教育施設の周辺では騒音が気にならない」などの項目で、実際に居住しての評価よりも、他地区からみたイメージの方が悪い結果となった。一方で、「近所に保育や教育などについて相談できる人がいる」や「保育や教育に関する情報をよく得ている」では他地区からのイメージより、実際に住んでみての評価の方が低い。実情よりも過度に低いイメージを持たれている項目では、そのイメージを改善することが必要と考えられる。

次に、子育て環境だけでなく街なかの居住に関する全般のイメージを、街なか居住者と、将軍野地区の居住者、桜地区の居住者とで比較する。比較した街なか居住に関するイメージを図-18に示す。図-18は子育て世代のみを

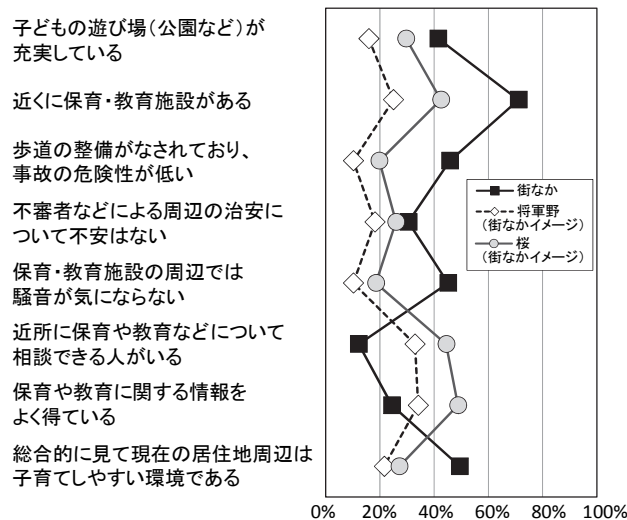


図-17 中心市街地へのイメージと現状の差



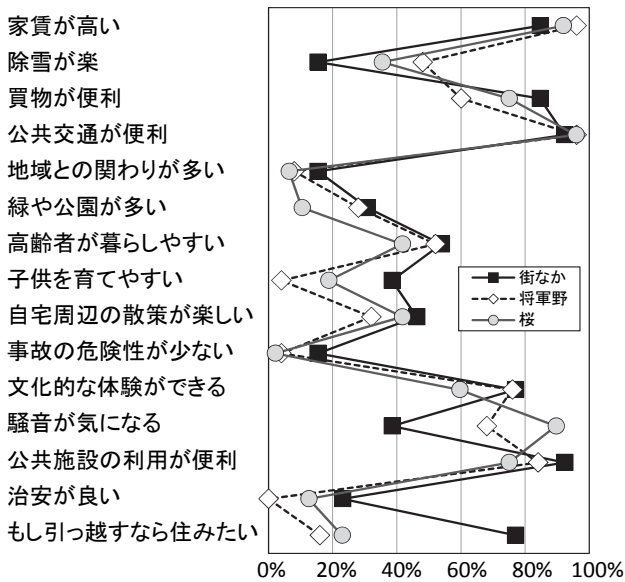


図-18 各地区住民の中心市街地へのイメージ

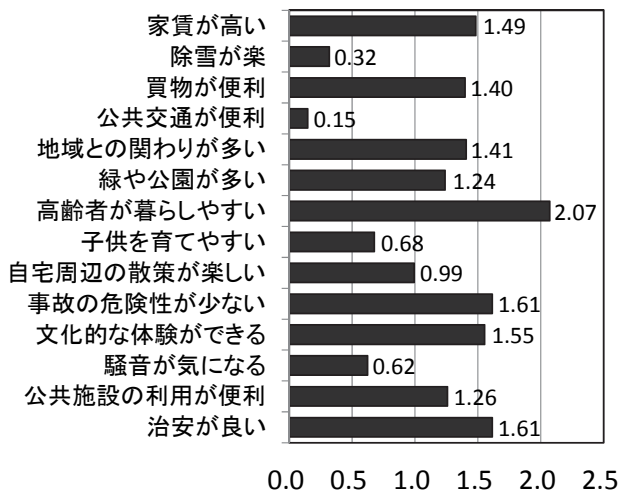


図-19 街なかへの居留意向への影響要因

抽出し分析した結果である。「除雪が楽」の項目では、將軍野や桜地区の被験者よりも、街なか居住者の評価の方が低い結果となった。「騒音が気になる」の項目でも同様である。一方で、「子どもを育てやすい」の項目では、將軍野地区や桜地区の被験者のイメージよりも、街なか居住者の評価の方が高くなっている。街なか居住者であっても「子どもを育てやすい」と回答しているのは約40%にとどまっており多くはないが、必要以上に他の地区からのイメージが低いといえる。將軍野地区や桜地区の約20%の被験者、街なか居住の被験者の約80%が「もし引っ越すなら街なかに住みたい」と回答している。將軍野地区や桜地区の被験者の約2割は条件さえ整えば街なかに居住する可能性がある。引っ越した際に街なかに住むかどうかに影響する要因を明らかとするため、数量化理論Ⅱ類による分析を行った。外的基準を「引っ越した場合に街なかに住みたいかどうか」、アイテムを

「街なかへのイメージの各要因」としている。分析の結果得られたレンジ値を図-19に示す。分析は子育て世代のみ抽出し行った。また、將軍野地区と桜地区の住民の回答を合わせて使用している。分析の結果、「高齢者が暮らしやすい」の項目のレンジ値がもっとも大きく、この項目が街なかに居住したいかどうかに影響していることがわかる。一方で、「子どもを育てやすい」の項目を見ると、レンジ値はそこまで高くない。街なか以外に住んでいる被験者にとっては、街なかは子育てをする場所というよりも高齢者になったときに住む場所としてイメージしていることが考えられる。

## 5. おわりに

本研究では、子縁による地域のコミュニティと、子育て世代の街なか居住について分析を行った。分析の結果、子縁レベルの高い被験者は、生活の満足度や子縁による地域コミュニティ醸成への効果認識、地域住民との関わり大きさ、地域の課題解決意識が高いことが明らかとなった。子縁によりこれらが醸成されることの直接の因果関係を説明することはできない。しかし、子縁による地域コミュニティ醸成の可能性が示されている。今後は、活動や行事への参加状況など、どのようにして子縁が醸成されていくのかを分析することが必要である。地域には多様な年代の人が住み、コミュニティを作ることが重要であるといえる。それは、中心市街地内であっても同様である。子育て世代の街なか居住促進施策は多くなく、今後重要になるといえる。郊外の新興住宅地に居住している子育て世代にとって、居住地選択では「子どもの保育・教育環境」を最重要視している。しかし、街なか居住者では「駅・バス停が近いこと」を最重要視している。駅やバス停が近いことと、子育て環境を整えることの両立は難しいことではあるが、検討していく必要がある。また、街なかに居住している子育て世代は、治安や騒音について問題視しており、これらの改善が必要である。街なか以外に居住している被験者は、過度に街なかの子育て環境や住環境のイメージが低いことが明らかとなった。子育て世代の街なか居住を促進するためには、これらのイメージの改善が必要といえる。引っ越す際に、街なかに住みたいかどうかに影響する要因としては「高齢者が暮らしやすい」ことの影響が大きく、「子どもを育てやすい」ことの影響は小さい。街なかは高齢者になった時に住むもので、子育てをする場所ではないとのイメージがあると考えられる。公園や保育所・幼稚園・小学校などの保育・教育環境整備のハード面や、治安問題の解決などソフト面の施策を両面から進めていくことで、これらのイメージを改善することが重要であ

る。自宅周辺の環境に対する重要度評価では、どの地区においても「近所の住民とのコミュニティが良いこと」は最も重要視されていない結果となった。核家族化やマンションへの居住が進み、地域全体で子どもを育てるといよりは、個人や公的な機関での子育てが望まれていると考えられる。しかし、孤独死の問題や子どもに遊びを教える機会が減少している問題など、地域コミュニティに求められる役割は大きい。特に街なかではそのコミュニティが希薄である。希薄になりがちな街なかでのコミュニティに対し、子縁によるコミュニティ醸成の効果に期待したい。

#### 参考文献

- 1) 川原さおり、木村一裕、日野智、田口秀男：「まちづくりや地域的課題における住民の参加と期待感について」、土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集,2010.
- 2) 小林大輝,鈴木雄,日野智：地方都市の中心市街地への居住に対する住民意識に関する研究,土木学会東北支部東北支部技術研究発表会講演概要,2014.
- 3) 長谷川茜,鈴木雄,日野智,木村一裕：地方都市の街なか居住に対する住民意識に関する研究,土木学会東北支部東北支部技術研究発表会講演概要,2009.
- 4) 溝上章志,藤見俊夫,内添啓太：まちなか居住促進のための選好セグメントの分離とその特性分析,土木学会論文集,Vol.69,No.2,121-134,2013.
- 5) 鈴木浩：「日本版コンパクトシティ 地域循環型都市の構築」、学陽書房、2007 pp26-27
- 6) 国土交通省 中部地方整備局 HP 『街なか居住』のススメ  
[http://www.cbr.mlit.go.jp/kensei/build\\_town/live\\_town/](http://www.cbr.mlit.go.jp/kensei/build_town/live_town/)
- 7) 榎木義一・井上紘一・守安隆：集団意思決定者のための支援システム、オペレーションズ・リサーチ、1980年10号、pp38-46、1980.

(2015.4.24 受付)

## ANALYSIS ON COMMUNITY OF THROUGH THE CHILD AND CHILD CARE ENVIRONMENT IN CENTRAL DISTRICT IN LOCAL CITY

Yuu SUZUKI, Satoru HINO, Yuto KAWAHATA and Kotaro NAKAMURA